

金沢のこころ

題字は五木寛之氏

飛行機の高度がぐんぐん下がって、屈いた海のもとに赤茶色の地面が広がった。飛行機は豪州北部の大都市タウンズビルの空港に

大学院留学生生活が始まったのは1990年1月だった。飛行機は豪州北部の小さな町に降りた。最初は苦痛だった行政の仕事も、やっ

という気持ちが増して強くなった。ちょうどその頃、「沿岸域管理」という言葉を知った。海の環境を保全しながら、海をうまく利用する、実用的な分野に思えた。沿岸域管理は、環境保全と海の利用を調和させるマジックワードだった。しかし日本の大学院で沿岸域管理を学べるころはなかったの

かし、県から留学許可をもらうことはそう簡単ではなかった。人事課からは、「地方公務員が1年間勝手に海外留学なんてまかりならん、やめてから行ってくれ」と言われた。一応は検討するということになり、最後になって許可が出た。時代は大きく変わった。時代は大きく変わった。地方自治体の国際化の流れも味方

豪州沿岸域管理を学ぶ

②

敷田 麻実

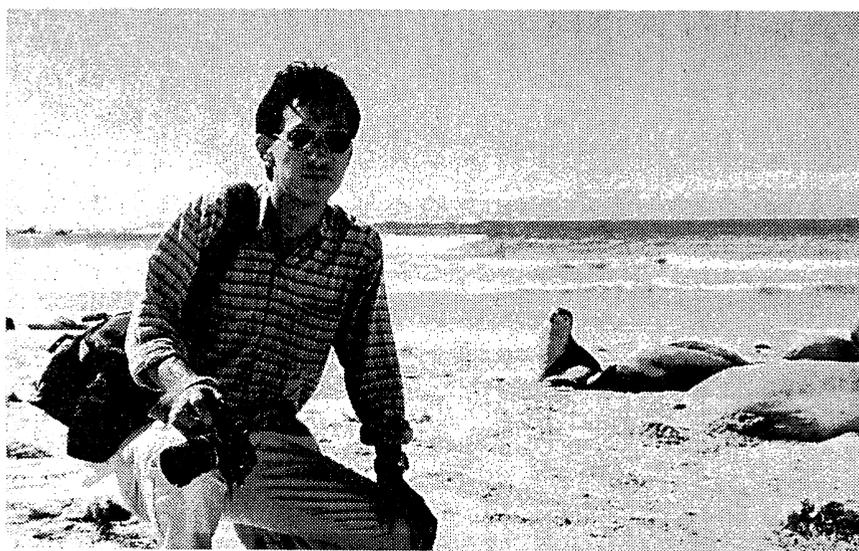
仕事の基礎、1から

到着した。タラップを降りて滑走路に立つと、椰子の木や熱帯植物がまず目に入る。期待が高まる半面、心の中の不安はいちおうなしに膨らんだ。

みればそれなりに面白くて、興味深い経験ができたし、楽しいことも多かった。しかし5年ほどたつと、毎日の繰り返しに退屈になり、生来の好奇心が頭をもたげてきた。もう一度勉強を

で、自然と海外での勉強を選択した。留学先は、アメリカにせず、わざわざオーストラリアを選んだ。幸い、時を同じくして、大学院で1年間勉強は予想以上に大変だったが、留学中に嬉しいこ

とも多かった。中でも一番管理学の最後の講義で、私嬉しかったことは、沿岸域の発表を聞いていた豪州の



留学先の豪州は環境に優しいエコツアーの先進国。アザラシの群れに近づける海岸もある。豪・カンガルー島で(敷田さん提供)

学生が、終わった後です。私に歩み寄り、「その資料をコピーさせてくれ」と言ってきたことだった。講義室を出ると、豪州特有の澄んだ青空が広がっていた。日本晴れだ、と思った。

(金沢工業大教授)